

保育計画成果報告書

法人名等	医療法人社団 裕歯会
施設名	わくわくモリモリ保育所
報告者（役職）	大谷 明美（主任保育士）
住所・連絡先	宮城県仙台市青葉区五橋 1-6-2 KJ ビル 3 階
	☎ 022-797-3858 E-mail hoiku@wakumori.jp

○タイトル（保育計画）

子どもたちが、わくわく楽しくモリモリ元気に体を動かし遊ぶ笑顔溢れる保育所作り

○主な助成備品

- ・ぱっと組み替えジム（ぱっと組み替えジム 兼用カート）
- ・かるかる4連マット
- ・ワイドカート4輪
- ・バランスバー

1. 保育計画策定の目的

平成29年4月に開所したわくわくモリモリ保育所。保育所名のように、子どもたちがわくわくした気持ちでモリモリ元気に通えるような保育を日々心がけています。

私たちの保育所はオフィス街の一角にあり、園庭や遊戯室といった広いスペースはなく、自然も少ない環境ですが、晴れた日は様々な場所へお散歩に行き、自然に触れて四季を感じられるような遊びを取り入れることも大切にしています。

0,1,2歳は成長する上で重要な時期であることから、小規模保育事業を行う私たちの役目はとても重要であり、子どもたち一人ひとりの一日一日を大切に、より良い保育ができるよう日々心がけています。限られた環境の中で、いかに遊びを工夫し、子どもたちが喜ぶ保育ができるかを課題として日々計画を立て実践していく中で屋外だけではなく、屋内でもダイナミックに体を動かして遊べる環境を作りたいと考えました。屋内で遊べる遊具を揃えることで、わくわくモリモリ保育所の『活動や体験を通して豊かな心、意欲、主体性を育める環境を整える』という方針に繋げ、子どもも保育士も、楽しく笑顔で成長できる環境を確立したいと思いました。

2. 具体的な実施内容

◎各年齢の発達を促すことができる運動遊具を用いて子どもの成長の発達の向上に加えて、遊びの幅を広げ、保育の充実を図ることをねらいとしました。

【ぱっと組み替えジム】

- ・登る、にぎる、渡る、すべる、くぐるといった様々な動きができることから、両手両足の使い方を学び、全身運動でしっかり筋肉をつける、身体を上手にコントロールする等、各年齢の運動機能の発達を促せるように活動に取り入れました。
- ・組み合わせが自由なことから子どもの発達や年齢、興味に合わせてレベルを変えることで、挑戦する気持ちや遊びから得る成功体験により育まれる意欲や有能感を養うことを大切にしました。又、組み合わせ（遊び）を子どもと一緒に考える事を通して様々なイメージができるようになり、イメージしたものを遊具で見立てる遊びができる表現力を高め、より充実した遊びを楽しめるようにしました。

【かるかる4連マット】

- ・ジムからの転倒での怪我を防ぐため、ジムのサイドに敷いて安全確保できるようにしました。
- ・安全にハイハイをしたり、歩いたりしてマットの感触を楽しむ、マットで傾斜をつけ上り下りをする、段差をつけてジャンプをする、保育士が援助をしながら前転を行う、発表のステージに見立てる、マットを縦に開いてトンネルを作りくぐって遊ぶ等といった使い方興味・関心を持ち、子どもたちが主体的に運動遊びをできるようにしました。



【ワイドカート4輪】

- ・乗る、押す、握るといった遊びを通して、友だちとの関わりや歩行の確立、バランス感覚が身に付くよう活動に取り入れました。
- ・行事（運動会や発表会）の中で、押したり乗って参加することで無理なく楽しんで行事に参加できるように使用しました。



【バランスバー】

- ・足裏を刺激することでバランス感覚をつかみ、ねらった場所に足をつけて歩く、足で踏んばる力（脚力）と体幹力を高められるようにしました。
- ・バーで円を作ったり、ジムやマットと組み合わせる遊びを発展させて楽しみました。



3. その成果と評価

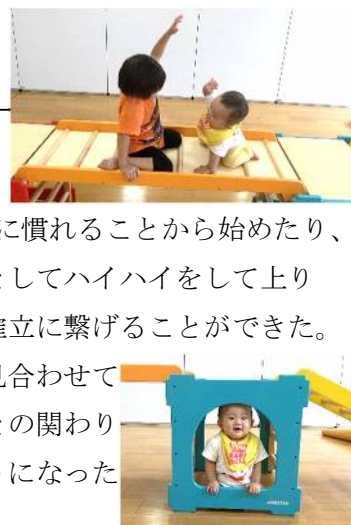
【ぱっと組み替えジム】

〈0 歳児〉

◎初めは怖がったり、自分で上ることが難しい様子だった。

⇒つかまり立ちや、手足を使って移動を楽しみ、まずはジムに慣れることから始めたり、すべり台の傾斜を緩やかにして滑るだけではなく、坂道としてハイハイをして上り遊ぶことで平坦な道以上に足腰の力が強くなり、歩行の確立に繋げることができた。

⇒土台をトンネルに見立てくぐったり、子ども同士が顔を見合わせて「いないいないばあ！」をして笑い合う姿があり、保育士との関わりだけではなく、子ども同士での関わりも多く見られるようになった



〈1 歳児〉

◎遊び方が分からない、はしごを怖がってなかなか渡れずその場で立ち止まってしまう子もいた。

⇒保育士が手足の置き方等ゆっくり丁寧に知らせ、繰り返し活動に取り入れていく事で徐々に慣れていき、年上の子の姿を見て刺激を受けチャレンジする子、自分の渡りやすい方法を見つけチャレンジする子等、できなくとも諦めずに挑戦する気持ちが育まれている姿が多く見受けられた。

⇒一人でできた喜びや達成感が自信へと繋がり、上手に身体をコントロールし何度も挑戦し全身を使って遊ぶ楽しさを感じている姿が増えた。又、公園等の遊具で遊ぶ際、ジムでの経験を経て高い所を怖がる子が少なくなった。



〈2 歳児〉

◎体力や運動能力も身についてきていることから積極的に挑戦する姿が多く見受けられた。

⇒ジムに慣れてきた頃に、はしごを斜めにするなど組み合わせに変化をつけ、遊びを展開することで積極的に全身を使って遊ぶことを楽しんでいた。身体の使い方を知り、運動機能の発達を促すことでジム以外での遊びがダイナミックになったり、できなかった動きができるようになる姿も多く見受けられるようになった。

⇒組み合わせを変えられることから子どもと一緒に「これはどこにする？」など、どのような形にしたら楽しいか考えて組み立てることで、より積極的にジムを楽しんだり、子どもたちで遊び方を工夫する姿も見受けられた。

⇒遊び方のルールや順番がある事を知らせることで押す、引っ張るといった行動が危険である事、順番を守る大切さに気付き、ジム以外の日常生活においても活かされている場面が多く見受けられた。



【かるかる 4 連マット】



〈0 歳児〉

◎トンネルは特にお気に入りです。初めは入りがなかった子も保育士が出口で顔を見せると嬉しそうに笑うなど、やり取りを楽しむことで安心してくぐることができました。又、ハイハイでくぐることや折りたたんで段差を作って上り下り、ジャンプをする等を繰り返すと、足腰の強化に繋がるとともに子

どもの興味、関心を高め、一人で上る事に挑戦したり、保育士に支えてもらいながら下りる（ジャンプをする）等、子どもが主体的に遊ぶ姿が見受けられました。



〈1、2 歳児〉

◎マットの上で自由に転がったり、保育士の支えにより前転をする等、全身を使って遊ぶことの楽しさに気付くことで興味を示し、保育士の支えなしで失敗しても自分から挑戦する気持ち、できた時の成功体験が自信へと繋がり心の成長も見受けられました。

◎マットを折りたたんで段差を作ることでジャンプをする他に、ステージに見たてて横一列に並びマイクを持っているつもりで歌や踊りを楽しむ等、マットを使って身体を動かすだけでなく、表現することに遊びを発展させることもできた。



【ワイドカート 4 輪】



〈0、1 歳児〉

◎カートに乗って押してもらうことを楽しむだけではなく、歩行が不安定な子は保育士が後ろについて補助しながらカートを使うことで歩く事の楽しさを感じ、意欲が引き出され歩行の安定に繋がった。

◎友だちを乗せてカートを押す子、カートに乗って友だちに押してもらう子、どちらも嬉しいようで顔を見合わせ友だちと同じ遊びを通して関わる楽しさを感じている様子が見受けられました。

〈2 歳児〉

・男の子の多くは車が好きな為、車をイメージしてカーブを曲がることを楽しんでた。女の子はお世話することに興味が出てきて、下の友だちを乗せるとベビーカーを押しているつもりでゆっくり押し、その姿を嬉しそうに保育士に知らせる姿が見受けられ、イメージを持って遊ぶ楽しさや優しさや思いやりの気持ちも育まれている様子だった。



〔バランスバー〕

〈0 歳児〉

◎歩行がやっと確立する子がほとんどだったことからバーを渡るのは難しく、興味を示さない子もいた。

⇒バランスバーに興味を示せるように、バーで円を作り空間を作ることで安心して中に入って遊んだり、遊びを發展させてボールや風船を入れることでプールに見立てて友だち同士笑顔で遊ぶ姿が見受けられた。

〈1 歳児〉

◎真っすぐ並べたり、ジグザグに並べ遊ぶと、初めはバランスが取れずにバーから落ちてしまうことが多かった。

⇒バーを短くし、保育士が手を繋ぎながら渡れるようにし、繰り返し遊ぶ事で慣れていき、バーを長くしても全身を使ってバランスを取り、バーから落ちることなく歩けるようになった。



〈2 歳児〉

◎上手にバランスを取り、渡る子がほとんどだった。

⇒並べ方を工夫する、トンネルやマットを組み合わせる障害物競走をする、バーの下を海に見立て、落ちたらワニに食べられる（くすぐられる）といったゲームに發展させることで、手足で上手にバランスを取り慎重に渡ったり、素早く渡るといった姿が見受けられた。



4. 今後の課題と展望

購入させて頂いた遊具のおかげにより、屋内でも全身を使ってダイナミックに遊ぶことで体力づくりだけではなく、私たちの目指す『豊かな心、意欲、主体性を育む環境』を整えることができ、心の成長にも繋がりました。

保育士の視点では、異年齢での合同保育の際、年齢を考慮し遊びが一定になることもあったり、クラスによっては遊びを繰り返すことで興味が薄れる姿がありました。そこで、変化をもたらすためにはどうしたら良いかを試行錯誤したり、子どもからのアイディアで「こんな遊び方もあるのか!」と気づき、子どもから学ぶこともあったという嬉しい報告もありました。保育士が年齢ごとの発達段階を把握した上で今後も、この遊具をどのように使い、遊びを展開できるかを楽しんで考えることで『保育』という仕事の魅力を感じ、子どもと一緒に保育士も楽しく笑顔で成長できる環境を大切にしていきたいと思います。

以上